

無 神 論

豊 田 剛

無神論¹⁾とは、読んで字のごとく、「神」ないし「神々」なるものは存在しないと主張する考え方である。こういう考えがあっても別に不思議でも何でもないし、むしろその方が極めて自然でまっとうなものの方の見方であるとすら感じられる。ところがどういいうわけか、それは昔から評判が悪いと相場が決まっているようである。それが証拠に、こういった思想はいつの時代においても、一貫して排除、排斥の対象とされてきたという事実がある。そのことは歴史が如実に示しているところであろう。しかしこれはとんでもない不当な仕打ちではあるまいか。無神論が古来より変ることなく甘受せざるをえなかった過酷な運命に思いをはせると、それが別に間違った考え方ではない、否全く正しい見解であると確信する者にとっては、なおさら「なぜ」という疑問を発しないでいることは難しい。それにはきっと何か深い理由がある筈である。

では無神論はなぜこれほどまでひどい排撃の対象にされねばならないのか。その排撃の論拠とは何なのか。また実際の排撃のされ方（実行）はどのようなものか。こういった点を吟味するのがこの論稿の狙いの一つである。ただそのためには無神論という考え方の基本構造を明らかにすることも必要不可欠の作業になると思われる。

人間というものは知能がある一定段階をこえるようになると、どうしても神なるものを創りだしたくなるものらしい。ここで人間が神の観念ないし像を思い浮かべる程度にまで知能が進展する以前の段階を考えてみよう。神観念の原型として、霊あるいは靈魂といった超自然的、神秘的なものがあって、それが人間に大きな影響力をもっているとする世界観（タイラーのいうアニミズム）をあげる見方もあるし、デュルケームのようにオーストラリアのトーテミズム

に宗教の最も原始的な形式を見る考え方もある。そのもう一つ前段階を考えてみるとどうなるか。靈魂の觀念が夢などに関する誤解から生じ、それが神觀念の基礎であるとする説の当否は今はおくとして、靈魂や精靈²⁾といった觀念に思っていたる前はどうかだったのだろうか。確実に想像できるのは人間が自然の脅威にさらされた極めて弱い存在であったということである。人間が命を落とすに至る原因は自然のいたるところにあった筈だからである。その意味で人間が自分の囲りの危険にみちた自然に対して大いなる恐れを感じていたことは確かであろう。仲間の死が珍しいことではなく、またいつ自分にも死が訪れるかわからないような状況では、恐怖の感情が大きな位置を占めていたのではないかと思われる。最初はただただ本能的に危険から逃げようとするだけであつたろう。しかしそうしつつも、そこから自然を対象化してみる視点が得られるようになるならば事態は一つ進展する。即ち自然を自分たちよりはるかに大きな力をもった恐るべきものとしてとらえること、弱い人間など容易に押しつぶしてしまうほどの、とても太刀打ちできない巨大な存在としてとらえることは、一つの自然解釈である。自然の力を靈魂の働きのように表象することも同様である。どのようなものとして表象するのであれ、自然の対象化は自然をなんとか味方につけられないかという発想に向かう道をひらくものである。人間は自然を恐れそれに敵対するだけでなく、味方につけようとする。自分たちの都合のいいように自然を導けないかという具合に。災いが避けられ、幸運がまいこむようにならないものかと。そう考える段階で、対象化された自然は人間化されている。すべて人間の考えることだから、考えられるものが人間の特徴をおびるのは当然である。ギリシア神話の神々のあまりに人間的なあり方は微笑を禁じえないほどである。いずれにせよ、このように対象化された自然に人間的特性をもちこむと、すでに神觀念に類するものが成立することがわかる。後になって思弁の限りをつくして純化された抽象的な実体のない神觀念と比べて、なんと現世利益に傾斜した人間的な神かと思われるかもしれないが、むしろこちらの方が神觀念の原型なのである。その意味で人間の心理には神なるものを創りださないではいられない性質があることは否定できない。ただそれが個々

人の心のうちにバラバラに発生するだけなら問題は少ない。それが宗教という具体的な形をとることで、人間各自の結びつきに関わり、社会的な活動になることによって様々な問題が生じるのである。

恐怖あるいは畏怖の念のようなものが神観念の形成のもとになるとしても、その形成が可能となるためには人間の想像力、思考力といった知的能力の発達が必要条件として加わらねばならない。そこで注目せざるをえないのが、元々人間の間にある知的能力の差ということである。この差はなんととっても厳然としてあり、それを否定するわけにはいかない。ここから必然的に生じるのは知能のすぐれた者が優位に立つということである。これは同時に支配、被支配という従属関係の成立をも意味する。

技術がある程度進展し生産力が増すことは、それによって生みだされる生産物の増加と余剰をもたらし、その生産物の所有という点で各人の間に差をうみだす。富める者と貧しい者の格差が生じるのである。その時点ですでに力関係の差、たくさん持つ者と持たざる者の差が生じている。これは支配、被支配の関係を示唆する。当然のこととしてこの関係において優位にある者はその体制を維持しできれば強化しようとする。その過程で神観念の生成も進むであろうし、宗教の役割も大きくなる。そのプロセスで知が決定的に重要な意味を持つことは、見落されてはならない重要な点である。F・ベーコンではないが、「知は力なり」なのである。平たくいえば知という面ですぐれた者が支配的地位を占めるのである。そのことは高学歴が出世の何よりの手段となっている現代でも何ら変ることなく続いている事実である。精神が身体に優先するという昔ながらの逆立ちした発想をあげるまでもなく、体力よりも知力が優先されることは何千年も変ることなく続いてきた事実ということができる。これでいいと決して考えるわけではないが、否むしろその弊害は目にあまるほどではあるが、そのあり方が変ることなく続いてきたことは認めざるをえない。そして大事なことは、そういう流れの中で宗教の活動を考察することなのである。

宗教はある程度以上の規模の構成員を擁しないと力を持つ存在とはなりえな

い。しかしその過程でも専門の聖職者の存在（養成）は不可欠である。そういう指導者に導かれることによって、宗教は発展をとげることができるからである。それは専門的知識の所有者が知識に乏しい一般の信者を指導（思想善導）するという構図である。知が力であるのは宗教において最もよく当てはまる。

宗教もそれが力を持つためには「組織」というあり方をとるしかない。構成員同士の結びつきがごくゆるい状態なら、その組織は力を十分発揮しえないだろう。ただ組織が大きくなればそれに比例してその力も大きくなるが、どんな組織にもつきものの腐敗もそれにつれて増大するという反面を避けることはできない。「権力は必ず腐敗する」とは名言だが、それはそのまま「組織」とおきかえても妥当する。宗教的組織は通常の一般社会に見られる組織、いわば世俗的組織とは根本的に異なるとして、両者の区別を強調する議論がよくある。これは根本的に間違った捉え方と断ぜざるをえない。神をいただくの、神聖性を標榜するだのやってみたところで、宗教の組織が他の組織と異なるはずはない。その構成員が同じ人間だという一事だけで、何を信じるかが違っていても、その組織が他の組織と別物であるなどということはありません。生身の人間によって構成されるものである限り、組織に違いようはなく、世俗の社会的組織にあるのとまったく同じ問題を宗教的組織もかかえていることはことわるまでもない。いくら聖なる職務だといってみたところで、ものを食べずにいることはできず、生きていくための収入なしにはやっていけない人間の集まりが組織なのである。いくら別世界のような高みにいるつもりであっても、権力闘争から自由な組織などありえないことは、既成の宗教組織の過去をみれば一目瞭然ではないか。

聖と俗の明確な区別は、たしかに長らく、宗教を理解する上で最も枢要なものとされてきた。しかしこの区別自体、神と同様、人間の頭の中で考え出されるもので、実際にあるものとは思えない。まさにあたかもあるかのように考え信じるフィクションに他ならない。しかし観念にすぎないといっても、それが実際に現実を動かす力を持つものであることは、過小評価することの許されない点である。とはいえ聖と俗の峻別というごくありきたりの議論が、うさん

くさいインチキであることは抑えておく必要がある。逆にいえば宗教はそれに依拠する形でしか自らの存立を維持できないということである。だからこそ宗教の問題を解くには、「聖」などと偉そうなことをいって自らを高調してみせても、所詮それは「俗」の問題にすぎず、そこに還元可能であることを示すことが有効になる。

更にもう一点付け加えておくと、応々にしてありがちなことだが、宗教の問題を思想の問題に局限してしまうという単純化が行われることである。思想や考え方が大事だということを否定するわけではないが、それだけを独立して取り扱うことが可能だとすることが間違いなのである。思想だけを切り離して扱おうとするところに、否、切り離して扱うことができるのだと考えること自体に問題がある。思想がそれを生みだす人間のおかれている社会的状況と無関係に生じることはありえない。それはその人間のおかれていた社会のあり方から大きな影響を受けずにすむはずはないからである。その点を十分考慮しないと思想の問題を正しく扱うことにはならないと思われる。特に宗教的思想の場合にはこの視点が欠かせない。

それを説明するために、キリスト教史上無数にある異端論争を例にとってみよう。争いはどちらの考え方が正しいかを決めるための論争という形をとるが、そこで生じる結果として、勝った方が正統とされ敗れた方が異端として排除される。異端とされれば追放程度ではすまず、命をとられることもありうる。しかしこれは正統とされた方の考え方が正しく、異端とされた方が間違った考え方をしていたということなのだろうか。そうではあるまい。それはあくまで勝った方が結果として正統とされたということにすぎないのではないか。この種の論争で客観的に正しい答があるのかどうかすらはなはだ疑わしいが、それは一まずおくとして、勝敗が正しさを反映するものかどうかとも問題である。マニ教をめぐる異端論争をみると、皮肉にも異端とされた方の考え方の方がまだましだと感じられる。一般的には多数派が勝つことが多いのだろうが、数の多い方が正しいとは限らない。いろいろな要因で勝敗が覆ることもあるだろう。それはどちらが正しいかということが論理や数だけできまるのではないことを意味

している。科学的な問題ならまだ論理の力がある程度信用してもいいかもしれないが、こと宗教となるとそうもいかない。「神」なるものが存在するかどうかそれ自体極めて疑わしいのに、それを存在すると信じ前提した上で、その神の像をそれぞれ描くのであるから、いろいろな描き方があるのも当然だろう。だがそのうちのどれが正しいのかを決める客観的基準などあるのだろうかといえ、そんなものがあるとはどうてい考えられない。要するに思想上の争いとみられるものも、もとを明らかにすれば、結局のところ、組織拡大のための権力闘争にすぎないといった場合が少なくないのではないか。それなら勝ち負けが生じ、勝てば官軍式に勝った方が正統とされる事情もよく了解できる。正しいから勝ち残ったのではなく、勝ち残ったから正しいとされたのである。いわば結果論なのであって、そこを間違えてはならないだろう。どうしても宗教(神)を生みだしてしまう社会とその宗教によって大きく制約される社会、そこをきっちり押えない限り宗教の本質をとらえることはできない。宗教が効率のよい洗脳装置であることは自明だが、その渦中にいる者にはそのことはほとんど意識されない。神を創ってそれにすぎるとは、自分の創ったものに自分が支配され、その奴隷になることである。それは何よりも大事にせねばならない自分の自由を二束三文で手放すことに等しい。これが疎外でなくてなんだろうか。

元にもどって「神は存在しない」と考えることはそれほどおかしなことなのかどうか吟味してみよう。いうまでもなく神は目にはみえないし、触って確かめることのできるようなものではない。つまり感覚によって把握される対象ではない。ではどうしてそんなものが存在していることが「わかる」のか。よくある答は特別な能力のある人には「わかる」というものである。そうだとするとそういう能力を欠いた一般の人々にはわからないということになる。そこでその特別な能力の持ち主のいっていることが果たして正しいのかどうかという問題になる。勿論一般の人びとにはそれは判定できない。となるとそれを判定できるのは同じく特別な能力をもった人だけということになる。しかしこれでは何の進展もない。特別な能力の持主のいうことが正しいかどうかを判定す

るには、その判定者も特別の能力の持主であることが求められる。仮にそうだとすると、ではその判定者の判定が正しいということを誰が保証するというのか。これはどこまでいってもキリのない話になる。誰にでも自分の目で見てわかるような明白な証拠(たとえば奇跡など)が提出されるなら話は別になるが、そんなことがおいそれとあるとも思えない。奇跡などというものはほとんどたいていインチキなものだからである。またその人の立ち居振る舞いや生き方といった「実践」そのものから正しさを推測しようという考え方もある。しかしそれも見る人により結論がばらつくことを避けえないだろう。そうするとそれは誰にでもわかるような形で真偽を確かめることができない事柄になる。つまり一般的には、それが正しいかどうかはそれを正しいと「信じる」か「信じない」かということに帰着するしかない。しかし「信じる」ということは、いうまでもなく、正しさを正当に確認することではない。確認しようがないからそういう形で決着をつけるにすぎないのである。正当に正しさを論証するすべがないから、そう信じたいが結論になるだけのことである。

全く同じことが禅でいう「悟り」にもあてはまることは面白い。本当にその人が「悟り」に達したのかどうかは本当に悟った人にしかわからないといわれるからである。「悟り」とは何なのかということ自体よくわからない上に、仮に「悟り」という状態があるとしても、悟ったとされる人が本当に悟っているのかそう自称しているにすぎないのかを区別することはむづかしい。よくある「悟った人にだけそれがわかる」という言い種は、上述の論理と全く同じである。結局のところ一般の人間に「わかる」ことではないということになる。

こういう場合「神が存在している」ということを「知る」とかそれが「わかる」とはどういうことなのか問われる。この「知る」「わかる」が科学的認識とか哲学的洞察といったたぐいのものでないことは自明であろう。「知る」といいつつその確認や証明があるわけではないからである。これまで「神の存在証明」なるものがずい分と試みられた。古今を通じてのおびただしい試みを見渡しても、なるほどといえるほどの説得力のあるものは皆無といい切ってもいいくらいである。この試み自体、理性の能力を超えたことを理性でやろうとする

無理を含んでおり、自家撞着もはなはだしいものといわねばならない。それはともかく、その試みにおいては「神は存在する」という根拠のない断定が結論として先にあり、それをどう証明するかという点に努力が注がれている。デカルトのようにすべてを疑うという方法的懷疑を武器に cogito ergo sum という基本原理に到達した哲学者ですら、「神の存在」という前提をいささかも疑っていない（ように見える）のはどうしたことなのだろうか。³⁾ 前提を疑うことが哲学の始めでなくてはならないのに。ひょっとすると神など存在しないのではないかといった疑問をいざことすら禁忌とされ、またそういう疑いが生じる余地がないほどキリスト教の人心支配が貫徹した世界だったのであろうか。それなら無神論がなぜあれほど迫害されねばならなかったのかもよく理解できる。中世から近世にかけてのキリスト教のように、宗教が権力と一体化して機能するような場合、そのマインドコントロールは人間生活の全面を覆うことになる。特に注目すべきなのは、それが社会習慣やモラルの規制原理として機能するという側面である。その影響力が極めて大きい場合、その思想がまるで自分をとりまく空気のように、何の違和感もなく自然に感じられるほどになる。そのように宗教がいわば社会のエートスと化した状態では、宗教はその社会をあるがままに現状肯定し維持しようとする保守のイデオロギーとして働き、その社会のあり方に疑問を持ったりする者をチェックする検閲機能をも担うことになる。善い人間とは神を信じる人間だとばかり、現行の社会秩序に従順な人間だけがまともな人間だとされる雰囲気をつくりあげる。それは宗教がモラルまでも管理の対象にするということである。「宗教は民衆の阿片」とはけだし名言であり、宗教の本当の恐ろしさは偽りの安らぎを与えて本当の問題から目をそらさせ、それであたかも問題が解決したかのような錯覚を与えることにある。こうして宗教は、どんなおかしなことが行われる矛盾にみちた社会でも、それに疑問を持つことを悪いことだと思わせ、疑うこと自体を困難にさせることで、見事に体制維持機能を果たすことになる。宗教といったものは、ほとんどすべて、その支配体制の維持に資するような形で人心を掌握し思想善導するのがその仕事であるから、その点を押えれば、なぜ無神論があれほど徹底的に

敵視されねばならないのかという理由も腑に落ちるというものである。

実情を考えてみると、一般の人々は「神は存在するのだろうか」などということ突き詰めて考えることなどほとんどないであろう。よほど問題意識があるとか思考力に秀でている人以外は、「神は本当に存在するのか」などといった面倒臭いことを考えたりしないものである。体制の支配的な考えに疑問をいだいたりしないし、そういうように教育されている。従ってそんなことを考えるのはよほどの知識人か宗教関係者ぐらいしかいない。知識の所有という点でも一にぎりの知識人(専門家)と大多数の一般人との間には大きな懸隔がある。知識において長じた者が支配的立場に立つ。これは宗教的組織が巨大化すれば益々顕著になる現象である。宗教的指導者としての権威づけはたいいていその知識によってなされるからである。西洋中世においてラテン語のできる聖職者がウルガタを専有し、ラテン語を解しない一般民衆の上に君臨していたことは象徴的である。ところで知識の習得はただではすまず当然費用がかかる。貧しい者はたとえ能力はあっても、他から援助してくれる者でもなければ学習を継続することはできない。すると当り前のことだが、知識修得の前提として一定の経済的負担が可能であるという制約が付け加わる。そうすると富裕な階級が知識のみならず、知識獲得の手段までも独占することになるのは自明のこととなる。貧困層に生まれても能力のある者が支援をうけて修学可能になるのもそこに含まれる。支配階級のイデオロギーが支配的イデオロギーになるのは、ごく自然の成りゆきなのである。だからこそ、先述の通り、「聖」と「俗」を異次元の如く峻別するお定まりの主張は意図的なごまかしとするしかないのである。ところがこんないいかげんな考え方が、俗耳に入りやすいからなのか、昔から一般に受け入れられてきたことは否定できない。それは「カイサルのはカイサルに、神のものは神に」(マタイ 22. 21) という人口に膾炙した聖書の章句の解釈からも確認できる。これはありふれた通俗的解釈では、政治の問題と宗教の問題は全く独立した別次元の事柄であることを意味しているとされるが、極めて疑わしい。イエスほどの人間がそんな間の抜けたことをいうはず

がないではないか。⁴⁾そこに働いているのは、ただの人間イエスを神の子に祭り上げ、キリスト教という宗教をでっち上げ、イエスが考えもしなかった教会なるものを作りあげ正当化する論理である。それは「聖」をたくみに利用して「俗」を動かすというやり方である。都合が悪くなると逃げこむ場所として「聖」なる領域を周到に準備してあるので、うまくそれを使いわけて、要領よく立ちまわるのが「宗教」という組織のずる賢い常套手段なのである。

しかし「聖」なるものも、所詮、人間の頭脳が作り出す観念にすぎない。「聖」なるものが実体として存在するのではなく、人間がそれを「聖」なるものに仕立て上げるのである。これは「神」についても全く同様である。「神」なるものが始めから実体としてあるのではなくて、人間の頭がそれを観念として創造するのである。従ってよくある「神が人間を創造した」などという主張ほど逆立ちした発想はないのであって、人間が「神」を創造するのである。人間の頭は何でも想像（創造）できるし、ありえないことでも考えることができるからである。従って人間が存在する限り「神」の像や観念はいくらでも無尽蔵に創造されうるものなのである。

普通一般に「神」は何でも知っており、何でもできるから全知全能とされる。またいたるところにいるので遍在するものらしい。良い人間には慈悲深く褒賞を与え、悪い人間を罰する裁き手としての機能も具えているらしい。生成変化するものではないから、ずっと昔からいるらしい。こういう存在を「神」だというなら、こんなものが本当に存在しているのだろうか、と疑問を持つ方がよほどまっとうな考え方といえるのではないか。そんな有難いお方がおられるのなら、なぜ世の中もっとマシなものにならないのか、なぜこんなに不条理なことがいっぱいあるのか等々尽きることなく疑問が湧出することは避けられない。むしろ「神」など存在しないとする方がずっと自然な見方のように思われる。普通に考えれば、こういう「神」が人間とは独立に人間の外に実在していて、人間に影響力を持っているとする方が作為的で不自然な主張なのではあるまいか。

にもかかわらずこの「不自然」な見方（有神論）が優位にあり続けたのが歴

史の現実である。それは何故なのだろうか。逆にいえば「無神論」はなぜこれほど唾棄すべきものとされ、常に悪者扱いされねばならなかったのだろうか。これが最初に提示した疑問であった。

「無神論」の対立概念はことわるまでもなく「有神論」である。有神論が歴史上ほとんど変ることなく優勢な地位を占めつづけることができたのは、それが支配のイデオロギーとして頗る有効であった点以外に求めることはできない。一般の人々は体制順応的に生きる方が楽であるし、そういう誘導も規制も世間の隅々にまで有形無形いろいろ張り巡らされているので、よほど切迫した事情でもない限り、その流れからはずれることはできない。また彼らは神の存在などという問題を理論的につきつめて考えるようなこともまずない。

ここでこの問題についての理論的取りくみ方を整理しておこう。

有神論の場合、始めから「神の存在」は自明の前提であり、何の根拠もないその思いこみが確定した結論としてあり、その独断的結論の正当化を後からはかるという構造がほとんどすべてに共通している。体制イデオロギーとしての有神論はたいてい権力と結びつき大きな力を持っているので、自らの立場を否定し脅かす思想である無神論には容赦なく敵意をむき出しにして襲いかかり殲滅をはかることも珍しくない。ただそれが主として理論上の争いであるように見えるのは表面上のことで、本質的な部分は政治的社会的な問題である。それを踏まえつつ理論的な問題を考えてみよう。

主題は世界ないし自然をどう見るかという見方の問題である。自然あるいは世界を観る時、神をその必須の構成要素と考えるか否かで見解が完全に分かれる。キリスト教の場合この世界を創ったのも神だと考えるから、当然その世界観に神は不可欠である。この見方の原型は多くの民族にみられる国造り神話に求めることができる。しかし説明原理としての神を必要としない世界観も十分ありうる。古代ギリシアのソクラテス以前の自然哲学者たちの思想にその先例がみられる。タレスからデモクリトスにいたる思想を見てみればいい。彼らは世界の本质あるいは根源を、水や空気や火といった物質的なものに見ようとし

たからである。これらは一種の「唯物論」と考えてよいだろう。したがって世界観に関しては、唯物論的な見方をとるかどうかは議論の大きな分かれ目になる。デモクリトスやエピクロス、ルクレティウスの思想に唯物論的発想の代表例を見ることが可能である。デモクリトスの考え方は機械的唯物論と呼ぶべきもので、不生不滅の「原子（アトム）」とそれが運動する場としての「空虚」によって世界を説明しようとした。ここには神の介入する余地は全くなく、そのように原子を運動させているのが神だとしても（汎神論的に）考えるのでない限り、神を必要としない考え方であることがわかる。このことから無神論の一つの基本形が唯物論という形をとるものであることが判明する。宇宙や自然を説明する原理として「物質」を中心におくなら、神を持ちだす必要は全くないからである。しかし紀元前5世紀の昔でも、唯物論的発想は神の必要を認めない「無神論」として非難されていたことを見落すべきではない。たとえばアナクサゴラスは「太陽は物質的存在である」といったために無神論という烙印をおされ追放されたといわれるし、プロタゴラスは「人間は神の存在については確実なことを知りえない」という懐疑論的な発言をしたためにアテナイを追われたとされる。このように無神論というレッテルを貼られることによって、迫害されたり追放されたりすることは古来からあったことがわかる。

エピクロスについてももう少し触れておこう。エピクロスは無神論者であったと考えられる。表向きは「神々は存在しているが、高次の存在で、人間のような低級な存在にはかかわらない」というのが彼の主張だったとされるが、それは世間の目をあざむくための偽装、韜晦であったのではないだろうか。なぜならデモクリトスの原子論の流れをくむその基本思想に神々の存在の必然性は全くないからである。たしかにマルクスが高く評価したように、デモクリトス的な機械的唯物論をそのまま継承するのではなく、自由の余地を残したことは、エピクロスの特筆されるべき功績であるとしても、それによって神々の存在の必然性が生じるわけではないからである。原子の離合集散で自然のすべてを法則的に説明することができるなら、神々が何のためにいるのかわからないではないか。（神々は存在していても人間には関与しないというのなら、存在して

いないというのと変らないともいえるが。)むしろ限りないオマージュをエピクロスに対して捧げたルクレティウスの「なんと宗教はかくも多くの災いをうながしえたことか (tantum religio potuit suadere malorum)」⁵⁾ という有名な一節ほどエピクロスの真意を代弁しているものはないのではないかとすら思われる。宗教を災いのもとと明確に断じるルクレティウスの発想は見事の一語につきるが、これはエピクロスの考えていたことでもあろう。エピクロスも「無神論」という攻撃から自らを守らなければならなかったのではあるが……。ルクレティウスはエピクロスがあわれな人間たちを神々に対する恐れから解放してくれたことに感謝し、「彼こそまさに神なりき (Deus ille fuit, deus)」とエピクロスをたたえている。

しかしながら我々にはごく自然と受けとめられるエピクロスやルクレティウスの思想は後々になってもキリスト教の攻撃目標になり続けた。キリスト教会は中世全体を通して「エピクロスの徒」の背徳性を痛撃してやまなかった。エピクロスはキリストの真の敵とされたのである。それどころか 18 世紀においてもまだ、ポリニャック枢機卿は『反ルクレティウス』なる本で「ルクレティウスの無信仰な体系は、もっとも非道な大悪に門を開く」と書いている⁶⁾ くらいである。このように有神論の側からの無神論攻撃がその不道徳性の指摘という形をとるのは看過してはならない重要な点である。それはエピクロスの快樂主義が背徳的なものであり、その逆にキリスト教道徳こそ正しいといたいのだろうが、とんでもない言い掛りである。エピクロスの思想を正しく理解していれば、それが所謂エピキュリアンという誤解された意味でとらえられているもの(刹那的享樂的快樂主義)などでは全くないことがわかる筈なのだ。それはストアのように快樂を蔑視するのではなく、アウトアルケイア(自己充足)という形で適正に快樂を認める立派な考え方である。それはまた死の恐怖や神々の恐怖からの解放を求め、身体の健康と心の平静、他物に依存しない自由な精神を至るべき目標とする。むしろエピクロスの神々なしに世界を説明できる立場は、アタラクシアという神なしの道徳を創始したことで高く評価される

べきなのではないか。従ってキリスト教の側からの非難は本質を正しく把えていない難癖にすぎない。そんなことをいうならキリスト教道徳はそんな立派なものかと逆にききたくなる。キリスト教は基本的に禁欲主義に立脚してきた。アウグスティヌスが結婚している者とのセックスは許容するという妥協案を出す⁷⁾までは、セックスそのものを罪悪視しネガティブにしかみないような立場が主流だったのである。それはイエスが処女から生まれたなどというアホな与太話まで創作してしまう点にも示されている。そんな考えなら自分達が亡んでしまうと思わなかったのかといぶかしく感じられるほど不自然な考え方である。この世など早くおさらばして、天国での楽しい生活に移りたいと思うほど、この世の現実是否定的にとらえられていたのだろうか。いずれにせよこの禁欲主義的傾向は、その後もキリスト教道徳のうちに根強く残り、大きな影響力を持ってきたと思われる。こんな不自然な発想でエピクロスを批判するなどおこがましい、百年早いといいたいところだが、現実にはキリスト教の方が支配的立場であり続けた⁸⁾のである。キリスト教がエピクロスをあれほど敵視したのは、神信仰があってはじめて道徳的に正しい生き方ができると考えたからであろう。しかし道徳の根拠に神がなくてはならないのだろうか。道徳は神に依ることがなくても十分可能ではあるまいか。エピクロスがその答をとっくに出していると思われるのだが……。

人間が「神」概念をどうしても創りだしてしまうものであることは歴史が証明している。それは神話や物語のかたちで多くの作品が残されていることから明らかである。しかし再度くり返すが、ここで間違ってはならないのは、それらの神の観念や像を創りだすのは、あくまで人間の精神活動であるという一事である。従って神や神々が人間を創造したというよくある物語にしても、人間の頭が造りだすものに他ならない。ところが奇妙なことにこの明白極まりない因果関係を逆転させ、始めに神があってこの神が人間を創造したなどという戯言を本気で信じるような転倒がしばしば生じるのである。人間が神を創るのであって、断じて神が人間を創るのではない。これは決して譲れない一点であ

る。ここを間違ふことからあらゆる迷妄、錯誤、狂信等が跋扈する伏魔殿が現出する。神など所詮人間の頭が考え出す観念にすぎないのだから、それが人間の外に実在するなどということはありえない。ところがそれを信じる人があとをたたないのが現実である。そういう人々を見ていると、彼らは本当に本気でそう信じているのかという疑問がわくのを禁じえない。もし信じているのだとすれば、どうしてそんなことが信じられるのか不思議で仕方がない。

それでもそれを信じる人がいるとすれば、それが何らかのメリットと結びついていると考えるしかない。ではそのメリットとはいったい何だろうか。それで心が安らぐ安心できるというプラグマティックな利点はあげるまでもない。それは当然の前提として、それ以外に何が考えられるだろうか。心の安寧といった個人の心理的な問題に加えて、信仰を同じくする者同士の連帯意識というのもあげられる。志を同じくする者ならば信頼関係で結びつくことができるし、同じ考えの者がいるということは自らの信仰の強化にも役立つ⁹⁾と思われる。人間一人では生きられないものだから、仲間の存在ほど心強いものはない。これを信じているのは自分だけではないという意識は、その信仰が正しいものと確信させる効能も有する。ただ大事な点は、仲間による信仰意識の強化が「組織」という形をとらざるをえないことである。組織によらない限り、力を発揮しえないというのが、人間社会の冷徹な原理である。しかし組織も人間が作るものである以上、内的にも対外的にも権力闘争なしで済むわけがない。宗教的組織といえども何ら例外ではありえない。組織は一種の有機体のようなものであるから、自己保存のみならず自己の繁栄、勢力拡大をおのずとはかろうとする。宗教的組織だからといって、俗世間の組織とはちがうという言い訳は通用しない。その理屈で自らを特別視し、正当化して世間の批判をかわそうとするのがよくある手だが、そんな言い分が通るはずもない。となると宗教的組織だと威張ってみたところで、俗世間の組織と同様、醜い権力争いや勢力拡大のためのプロパガンダと無縁でいられるはずがない。もっと大事なことは、組織自体独自の論理をもって動くので、自分自身すら自由に制御できないということだけでなく、さらにもっと大きな流れにたとえられるような運動の中にまきこ

まれ、その流れに流されてしまうということである。これは国家ですら資本の論理を思い通りに制御できないのと類似の現象である。組織が腐敗するのは世の常であるから、組織が大きくなりその権力が大きくなるにつれ、その腐敗ぶりも比例的に増大することは避けられない。このことは当初ユダヤ教から発した一つの新興宗教にすぎなかった原始キリスト教が、ローマ帝国の公認をうけるや大きく勢力拡大に成功し、その後益々権力を自らに集めていった過程に明瞭に示されている。

イエスは「教会」という組織を作ることなど考えたこともなかった¹⁰⁾であろう。しかしそのままでは大した力になりえなかったことは確かである。力を持つためには組織を作りそれを拡大するしかない。キリスト教会が後にやったことは、イエスが夢にも思わなかったことにちがいない。イエスを本尊に祭りあげながら、イエスの精神とは全く反対のことをやってきたのがキリスト教の歴史である。イエスをダシにして、その教説の都合のいい部分だけをつまみ食いしてでっちあげた信仰体系がキリスト教なのである。権力と野合したり、権力そのものとなって君臨することなどお手のものである。平和と愛の宗教などというお題目とは裏腹に、どれほど多くの血が流されてきたことか。異教徒の血を流すだけならまだしも、キリスト教徒同士で何度殺し合ったことか。こんなことが起こるのは、それが聖なる組織だとかいって自己正当化していながら、世俗の組織と何ら変わらない原理で動いているからである。

キリスト教に限らず、宗教というものはほとんどすべて、当初どんな高邁な志をもって出発しようと、とどのつまりは支配体制のイデオロギー的支援装置として機能してしまうのがその定めである。体制に対する反抗から生じた場合ですら、いずれそのうち体制にとりこまれるというのが、宗教というものの変わらざる運命であった。人々が宗教を求めるのは満たされないものがあるからで、そこに問題解決への希望を見出すからである。ところが宗教がやるのは不満のガス抜き作業にすぎず、それで問題が解決するかのような錯覚をいだかせることができれば十分なのだ。人々の不満をそらす装置としてはこれほど巧妙なものはなく、また支配体制にとってこれほど重宝なものはない。いつの時代

にも宗教がなくならないわけである。そういう宗教にとって「無神論」¹¹⁾が許せない敵になるのは当然で、公序良俗に反する危険思想というレッテルをはって葬り去ろうとする。それは逆に無神論の正しさを証明しているのではあるまいか。体制を変えたいなら、もっとより良いものにしようとするなら、体制の主導原理を疑うのはその第一歩である。ニーチェが「神は死んだ」といみじくもいったように、既成の価値（神）がもはや価値でないことを宣言するしかない。それは無神論の宣言である。

註

- 1) 参考までに辞書の定義をあげておくと、「一般に神の存在を否定する哲学上ないしは宗教上の立場をいう。」(平凡社、哲学事典)、「神の存在と活動を否定する立場」(岩波哲学・思想事典)、「無神論とは、本来「有神論」への対立概念であり、神の存在証明への懐疑もしくは神の非存在を論証しようとする哲学的論議をさす。」(ニーチェ事典、弘文堂)

西洋思想の文脈で「無神論」という言葉がターミノロジーとしてよく使われるようになるのは、16世紀から17世紀への転換期であるとされる。もっとも、そういう考え方や対応は古代からあったわけで、たとえばローマ帝政期に「アテオス」ないし「アテオテース」なる言葉は、正統とされる宗教的儀式に参加しようとしぬ人々のグループをさすために使われた。キリスト教徒たちもこのような儀式に合うような神礼拝を行わず、そのために「ノウィタス(新参者)」という非難を受けたので、彼らは紀元1世紀の見方では、「アテオイ」とみなされた、とされる。

(Historisches Wörterbuch der Philosophie Bd.1 S.595. Schwabe & Co. Verlag. Basel/Stuttgart. (hrsg.) J. Ritter)

- 2) 霊、靈魂、魂といった類似の意味を持つ表現に微妙なニュアンスのちがいがあがることは否定できないが、原始宗教を例にあげるまでもなく、人間は太古からこういうものの存在を信じるのが常であったと思われる。魂が人間の肉体に宿ることを生とみなし、魂が肉体を去るのが死だとする見方は、人間に受け入れられやすいものとみえ、世界中に広く見られるものである。そういう見方はプラトンはおろか、もっと古い『ウパニシャッド』(B.C. 800～700)にすら既にある。現代でもこういったものの実在を信じる人は少なくない。靈魂という概念には、その人の人格としての本質を示す聖なるものとしての soul と人間のうちに自由に入出入りする spirit という二つの意味が含まれているとされるが、日本古代の文献に見られる「たま」という用語もこの二義を持っているとされる。「たま」のよい面が「かみ」とされ、わるい面が「もの」、「おに」となったという解釈は面白い。それは、「たま」(魂)の方が「かみ」(神)よりも概念領域が広く、またより早期の成立を推測せしめるからである。

外国では靈魂はもともと「氣息」や「風」といった物理的現象から着想されたものと考えられている。そのことは、ヘブライ語(ルアツハ)、サンスクリット(アートマン)、ギ

ロシア語（プシュケ）の語源的意味から容易に確認することができる。息をしているか否かは誰にでもわかるから、それによって生死を区別することを知った人間がそれを靈魂のようなものとして表象するようになることは容易に想像することができる。そういう経緯を踏まえても、靈魂のたぐいは、神と全く同様、実在するものとは考えられず、人間が心に思い描く観念にすぎないと考える。キリスト教でいう「神」もさることながら、「聖霊」というのももっとも理解しがたい概念の一つである。神はその主体においては一つであり、この一つの神のうちに父と子と聖霊という三つの位格があるとすると、三位一体説など、よくこんなアホな理屈を中心教義だといえるものだとあきれてものがいえない。かつての「絶対矛盾的自己同一」に勝るとも劣らぬ馬鹿馬鹿しさではあるまいか。

安斎育郎『霊はあるか』（講談社、ブルーバックス）参照。

- 3) デカルトはいくつか「神の存在証明」を提出しているが、よく知られているのは所謂「存在論的証明」と称されるものである。それは神の概念の分析から先天的に神の存在を証明しようとするものである。即ち神という概念の完全性に着目して、存在するという属性を欠くならば、神は完全でないことになるから、神は存在するのだ、というものである。完全な存在者ならあらゆる属性をもれなく具えている筈だから、当然存在という属性も具えているのでなければならないというわけである。これをまともな証明と呼べるのだろうか。デカルトはまた「人性論的証明」といわれるものも提示している。神は完全なものであるのに対して、人間は不完全なものである。ところがこの不完全な人間のうちに完全な神の観念がある。不完全なものが完全なものを造り出せるはずはないから、これは神が存在していて、その観念を与えたと考えるしかない、とするものである。これで証明になっているのであろうか。カントの登場を願うまでもなく、いかにもあやしげなものであることは自明ではあるまいか。
- 4) この点については、田川建三『思想的行動への接近』（呉指の会）1972. 第一章に凡百の解釈とは一線を画するすぐれた解釈が提出されている。
- 5) 『De rerum natura』（第1部、100）
- 6) アンリ・アルヴォン『無神論』（竹内、垣田共訳 白水社 文庫クセジュ）30頁参照。
- 7) それでもセックスは子供をつくるためののみ行われるもので、快楽を目的としてなされてはならない、などという愚かな考えがあったようである。カトリックには今でもそれが残っているのではないか。
- 8) その理由の一つとして、結婚を神が結びつけた人間のつながりとして教会が一手にとりしきり、勝手に離婚することを許さないとすることで固定化し、社会の安定化に資するとともに、それが体制維持という目的の遂行に有効に働いた、ということがあるのではないか。
- 9) 各人のいづく神観念が同一だとして、それに基づいて「神の存在証明」をなそうとする試みもあったが、そんな同一性が保証されるのだろうか。信仰を同じくする者が思い描く神の像が各個人において同じだなどとどうして言えるのか。各人がそれぞれちがうように、各人のいづく神観念もそれぞれちがっているのではあるまいか。
- 10) イエスの思想を後のキリスト教会が徹底的にゆがめてしまったことは間違いない。しかしイエスについていわれることのかかなりの部分が不確かなものであることは事実である。

イエスが十字架上で死んだということすらフィクションではないかとする見方もある。それはパウロの嘘、捏造であって、本当は生きながらえてキプロス島で死んだという説すらある。辻中剛『偽キリスト論』（パロル舎、2001）参照。イエスについては確実な資料が乏しく、福音書も全面的に信用するわけにはいかない。そのためいろいろなのが好き勝手につけ加えられることになり、本当のイエスはどんなだったかが極めてわかりずらくなっている。塗りたくられた厚化粧をぬぐい去らねば元の姿はわからない。筆者のように神の存在を認めない立場からすれば、イエスが神の子であるはずがない。だからイエスとキリストを区別することは極めて大事なことなのである。ところがイエス・キリストというのを一まとまりの固有名詞として疑わない人が大部分であるのは嘆かわしい。イエスがキリスト（救い主）であると信じるのがクリスチャンであるから、彼らがイエス・キリストというのはよくわかる。しかし別にクリスチャンでもない者までが、イエス・キリストと何の疑いもなくいうのは明らかにおかしい。イエスをキリストと信じるか信じないかが問題なのだ。こんな初歩的な問題意識すらない人が大部分というのが現実なのである。イエスをただの人間にすぎないと確信する者にとって、イエスの神格化がどのようにして行われるかそのプロセスを吟味することを今後の課題としたい。

- 11) この論稿では「無神論」について一般的なアウトラインを示すことしかできなかった。次稿では無神論の思想史としての全体像を考えながら、「無神論論争」でイェナ大学を追われたフィヒテの例なども含めて具体的な考察をせねばならないと考えている。